『身近な仏教用語』に学ぶ真宗入門」

二〇二〇年九月一二日（土）

万行寺住職・東京仏教学院講師・ＮＧＯアーユス理事　本多靜芳

第六回「お浄土の世界は、「あの世」なのか～【彼岸】に到（いた）る」

はじめに　「あの世」という言葉

・死後の世界　意識調査　宗教情報センター　https://www.circam.jp/reports/02/detail/id=5097

ＱＲコード→

同じ世界を生きること、同じ世界に向かって、この「いのち」を生きることはできるのか？

一、月を指す～象徴ということ

信楽峻麿『真宗学シリーズ①現代親鸞入門』法藏館九四頁

「色もなし形もましまさず」「心も及ばれず、言葉も絶えたり」『唯信抄文意』『註釈版聖典』七〇九頁

さとりそのもの―姿形（仏像）や言葉音声（名号）で表す―究極的な真理、真実についての象徴表現

「弥陀仏は自然のやう様を知らせんれう料なり」『自然法爾章』七六九頁

・『顕浄土真実教行証文類』「顕浄土真実信文類」（「信巻」）『大智度論』引用、四一四頁

独神学者　Ｐ・ティリッヒ

・パウル・ティリッヒ（一八八六～六五）

一、象徴は、それ自身を超えて何かを指示する。
二、象徴は、それが指示しているものに関与する。
三、象徴は、閉ざされた究極的な真実の世界を開示する。
四、象徴は、人間の心の深層、霊　性を開発する。
五、象徴は、社会の集団の無意識において創造される。
六、象徴は、社会の状況が変化すれば死滅する。

※今、仏像が、美術鑑賞の対象でしかなくなっている（呪術、マジナイ）

☆教えを客観的に学ぶだけなら再解釈はない→だから仏教は主体的な学びが問われる

二、信心のご利益～「現世の証」と「当来の証」

信楽峻麿信楽峻麿『教行証文類講義』第七巻「証巻」「真仏土巻」参照

『教行証文類』―「教巻」「行巻」「信巻」「証巻」「真仏土巻」「化身土巻」六巻

「証巻」―浄土真宗の利益┬「現世の証」
　　└「当来の証」

「真仏土巻」┬「真実の仏身と仏土」―真の信心の人に明らかになる、真の仏と真の世界
　　└「権仏の仏身と仏土」―信心の不徹底の人にとっては、仮の仏と仮の世界

信心の利益―真実の証┬現世―大乗の正定聚・不退転の位に入る、現生十種など種々の利益を得る
　　└来世┬自分の利益―涅槃成仏―自利―法性のみやこへかえる『唯信抄文意』
　　└他者の利益―還相摂化―利他―生死海にかえり入りてよろずの衆生を助く
　　『唯信抄文意』

すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。『歎異抄』第一条　八三一頁

三、死後の浄土往生とはどういうことか

法然上人「往生というは捨此往彼蓮華化生なり」　『往生要集大綱』真宗聖教全書四-二九三

謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち、大悲の誓願に酬報するがゆゑに、真の報仏土といふなり。すでにして願います、すなはち光明・寿命の願（第十二・十三願）これなり。

「真仏土巻」三三七頁

まづ善信が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは、疑なければ正定聚に住することにて候ふなり。さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。

二頁

如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり。としごろ、おのおのに申し候ひしこと、たがはずこそ候へ。かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで、往生をとげさせたまひ候ふべし。第十六通七七一頁〜

往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにても候はず。めでたき智者もはからふべきことにも候はず。大小の聖人だにも、ともかくもはからはで、ただ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。ましておのおののやうにおはしますひとびとは、ただこのちかひありときき、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたく、めでたく候ふ御果報にては候ふなれ。とかくはからはせたまふこと、ゆめゆめ候ふべからず。第四通七四二頁〜

かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ。　第十五通七七〇頁

※信楽峻麿『教行証文類講義』第七巻二五五頁、鳥取の足利源左（一八四二〜一九三〇）同行の逸話。

四、「またあえる」と言える生き方　信楽峻麿　『この道をゆく』　永田文昌堂一九八七年 127-138頁

・父を見送る心　父が残した言葉

老院長「ご老院、あと、もうしばらくですぞ。私もあとから参りますからな」

父の遺言「人間界に生まれえたことの不思議さ、家族としての出あいの宿縁を深く思え
「そして念仏を大切に生きよ、浄土で待っている、という教誡の言葉

兄―若い生命のまま病没―死の直前「またあおう」

・未来が見えてくる叡知

龍大元学長 信楽峻麿

人間の知恵
「科学的な叡知―現代人の誰もが身につけている―多くの文明を築きあげ、今日のような歴史や社会を進展
「宗教的な叡知―仏教の、親鸞聖人の教え―念仏を申す日々の世界を通してひらけてくる
この信心の智慧―はじめて真実に出あい、人間に生まれたことの尊さを思う
―いままでの世俗の知恵では見えなかったものが、新しく見えてくる、知られてくる

「科学的な叡知―過去の歴史を測定、解明。未来も、対象によって的確に予知できる
「宗教的な叡知―信心の智慧―私自身の過去と未来について、明確に知見することができる

親鸞聖人―宗教的な叡知―自己の現実相を深くみつめ
「過去―無始以来の罪の宿業を痛み、また仏の大悲摂取を念じた
「未来―まちがいない往生成仏を喜ばれた―いずれも、こうした信心の智慧にもとづいて見通された世界

・仏の生命をたまわる

「信心の智慧」（和讃）―世間を超えた、真なる仏の生命を賜り、この世を生きてゆくことができる
「如来の家に生まれる」（行文類）
「本願を信受するは前念に命終するなり。
即得往生は後念に即生することなり」（愚禿鈔）
本願信受＝信心―生まれたままのこの世俗の生命に死して、新しく仏の生命にたまわって生きてゆくこと

第一の生命―素朴な生命のことで、微生物に宿る生命、植物にある生命、人間の細胞の生命
第二の生命―個体、人格としての生命。犬や猫などのすべての動物。
第三の生命―宗教的な叡知によって見いだされる、宗教的な生命。
―念仏の信心を開くことにおいて、仏からたまわるところの「仏の生命」

「この世の生命―地獄ゆきの生命
「仏の生命　―信心の開発→無量寿として、「如来の家に生まれる」、「後念に即生する」ことができる
―仏よりたまわるところの永遠の生命